

児童健全育成賞（数納賞）佳 作

里親として生きる

—社会的養護の子どもたちの悲しみと希望—

愛知県春日井市

自立援助ホームいっば 施設管理者 井 上 陽 子

1. はじめに

幼い子どもたちの命が虐待により失われるという事件が後を絶たない。子どもたちの悲しみ、怒り、絶望感に思いをはせると胸が締め付けられる。里子たちや、管理者として関わる自立援助ホームの子どもたちの顔を見つめながら私は感謝の思いでいっぱいになる。

- ・虐待死させることなく、我が子の命を児童相談所に託して下さった実親さん
 - ・子どもの変化に気づき素早く警察や児童相談所に繋げて下さった学校の先生方、地域の皆さん
 - ・自死せず過酷な日常を生き抜いてきた子どもたち
 - ・子どもの命を守る最前線で昼夜を問わず奮闘して下さっている児童相談所の皆さん
- あなたがたのおかげで私は尊い命と出会うことができました。

2. 里親として生きる

私は、教員退職後60歳を越えて里親という生き方を選択した。そのきっかけとなったのは、「非行」と向き合う親たちの会で取り組んでいた付添人活動で出会った養護施設出身の新一君（17歳）。

付添人とは——

大人が刑事事件を起こすと、逮捕・拘留・起訴・裁判という一連の流れの中で、被告人の利

益を守るために弁護人をつけることが憲法で保証されている。少年事件ではこの弁護人のことを付添人と位置付け、鑑別所での面会を通して非行の背景を探り非行からの再生の道を明らかにしていく役割を担っている。弁護士が担うことが殆どであるが、少年法では一般の人の付添人も家裁の許可を得て可能としている。

鑑別所の面会室で、淡々と語る彼の世界・・・養護施設入所に至るまでの生い立ち、養護施設での生活、15歳で住み込み就労、離職と共に住む場所も失いホームレス状態、17歳で大麻所持により逮捕・・・。

教師としていろんな子に出会ってきた私知らない世界がそこにはあった。新一君のような子を教育現場で見落としてきたのではないか。

やり残してきたことを、地域の中で、家庭の中でまだやれる。またやれる。残りの人生を社会的養護の元にある子どもたちと共に生きる道、里親として生きることを選択した。

研修を経て養育里親に登録、その後専門里親にも登録、中・高生の子どもたちを現在も受託している。2016年には里親仲間や当事者、研究者、BBS会の若者たちと自立援助ホームを立ち上げ、管理者として関わっている。

里子たちへのメッセージ

彼らと出会って最初に私の思いを伝えている。
①幸せに生きていくチャンスをもらえたね。チャ

ンスを運んでくれたのは児童相談所。里親は君が幸せになるためのお手伝いをする人。

- ②君の生活費や教育費は国民の税金で賄われている。でもそのことを恥ずかしいと思わなくていい。憲法・児童福祉法で決められている子どもの権利だから。だから里親に遠慮することもない。
- ③君が幸せになることが社会への恩返し。やがて恩送りができる大人になってくれれば私は嬉しい。

穴埋め作業に付き合う

新人里子がやってきた。先輩里子が彼の言動を観察しながら耳元でささやく。「俺も最初はあんなふうにお利口だった?」「うーん、1ヶ月ぐらいはね」「良い子はそんなに続かんよ」その通り。良い子は長くても1ヶ月。その後は「なんで?」「なんで!？」の言動が頻発。嘘、暴言、お金の持ち出し、家出、喫煙、学校からの呼び出し・・・。

虐待、貧困、施設生活などで満たされることがなかった数々・・・愛情・物・友だち・食欲・自由・自己肯定感・生きる意味・・・。彼らは里親の元で安心・安全を感じられるようになると、心の中のあちらこちらに空いた穴を必死で埋めようとする。そのやり方は未熟。時には後退、問題行動と大人には映る。

埋めなければならない穴は可能な限り埋めて、自己肯定感と他者への信頼感を胸に社会に踏み出してほしい。里親の元であまえて、要求を出して、失敗して、失敗の原因を共に探り、そこから見えてくる社会や子どもたちがおかれている現実と一緒に考えていきたい。基本的なスタンスは「私はきみのような経験をしていないから分からない。だから聞かせてほしい。教えてほしい」

3. エピソード1 ～15歳でホームレスの新一君～

*以下エピソードの登場人物は本人の了解の上、全て仮名で表記、一部フィクションを交えて紹介しています。

「うちの若いモンが大麻所持でパクられたんですよ。ヤツは養護施設出身で親がいないんです。助けてやってもらえませんか」と次郎さんから付添い人依頼の電話がかかってきた。

次郎さん(23歳)は少年院出院後エネルギー発散の場を暴走族から会社経営に転換、相変わらずパワー全開で動き回っている。ヤツとは17歳の新一君。6ヶ月前から次郎さんの会社で働き始めたという。若いモンをかつての自分の姿と重ね、見捨てずに立ち直りに手を貸そうとしている次郎さんを応援しなければと、付添い人を引き受けた。

「父からの母へのDV、見ないように、考えないようにしてきた」

鑑別所の面会室で淡々と語り続ける新一君。

「父親はアルコール依存。母へのDV。父が暴れ出すと自分は見ないようにしてきた。高学年のとき母が父の後輩とデキて家出。父が包丁を持って後輩を殺しに行くと言いだし自分も現場に連れていかれた。父はその場で逮捕され母は救急車に乗せられ入院。自分は一時保護所を経て養護施設に入った」

多くの修羅場を目の当たりにし不安と恐怖で震え続けてきたであろう子ども期。残酷としか言いようがない。新一君は無表情のままそれらの事実を語り続ける。「見ないように」「考えないように」することで自分を守り感情も奪われてきたのだと感じた。

入所した養護施設で衣食住は保障されたものの大舎制でいじめが横行。「毎日いじめられたが職員には言わなかった。いじめがひどくなるし職員が助けてくれるとは思えなかった」。生活の場でのいじめは、虐待同様、現場からの撤退という選択が困難でただ耐えるしかない。心の傷は癒されることなく孤立無援感を深めていく。

「とにかく早く施設を出たい」という思いを募らせ、中学卒業と同時に住み込みで現場仕事に就く。しかし続かず、職を失うと同時に居住を失い、帰る場所のない新一君は友だちの家を転々とし、たかだか15歳でホームレス状態に

陥っていく。幾つ目かの就職先が次郎さんの会社。アパートを借りてもらい生活が安定したかに思えた矢先の逮捕。

「仲間作り」「遊びの一種」「寂しさを埋めるため」の大麻吸引

「初めて大麻を吸ったのは16歳の頃。好奇心。はまるようになったのは3ヶ月前ぐらい。友だちが自分の部屋に集まってきて毎日吸うようになった。みんなで吸うとハイテンションになって楽しかったし嬉しかったし孤独感がなくなった。でもだんだん、吸うのが目的で友だちが来ると気づいてきた」「もともと寂しがりやで一人になると不安になるので大麻が目的で来るのもいいかと思うようになった」

薬物依存になる一歩手前で現行犯逮捕。様々な不幸に遭遇しながら福祉に助けられ生き伸びてきた新一君。今回は警察に助けられたのだ。

審判の場で「捕まって良かった」「自分には普通の人が家庭で教えられることを教えてもらえなかったというハンディがあって、自信がないし人も信用できなかった。考えても言ってもどうにもならないのでへらへらしている方が楽だと思ってきた。こんな自分を次郎さんは見捨てずにまた雇うと言ってくれた。後は行動で感謝の気持ちを表すしかない」と裁判官の目を見つめて答える新一君を次郎さんがうなずきながら見守っている。新一君を支えることで、次郎さんもまた大人になっていく。

それから1年後、保護観察も終了し次郎さんの片腕となって働く新一君を年上の奥さんが支えてくれている。

次郎さんは、少年院出院者や養護施設出身者の雇用を依頼すると「ホント変わったヤツばかりですね」とぼやきながらも、余裕の笑顔で引き受けてくれている。

4. エピソード2 ～虐待・ネグレクトの翔君～

翔君は両親から身体的虐待とネグレクト。子どもは6人。下の子の世話で学校は殆ど遅刻か欠席。布団はなくコートをかぶって寝ていた。

朝起きてまず思うのは「今日食べることができるか」ということ。中2の時、「俺、虐待されている」と自ら警察に出向き、児童相談所が保護、中3で我が家にやってきた。

「虐待から逃げたのは偉かったね。勇気がいったでしょう?」「警察に行こうと言ってくれたのは友だちのAの母さん。虐待されていることを始めて話した相手がA。泣きながら聞いてくれて、いつか一緒におやじをボコリに行こうと言ってくれた。嬉しかった」

「親父を殺すか自分が死ぬか」

「虐待されるといつ状態になって、生きる価値があるのかと思えてくる。自分が悪い、自分が生きているから虐待する。自殺したいとずっと思っていた」「虐待されると心がなくなる。考えない。考えるとおやじを殺しそうになる」「シャーペンで手をぶっさしたり、友だちと騒いだりしてストレス発散してきた」

目の前に立ちふさがる巨大な敵におののき、自分を責め、従順を装いながらも、心の中では「自分が死ぬかおやじを殺すか」という葛藤に苦しみ始めた翔君。やんちゃ仲間のA親子が、闘争ではなく逃走という選択を後押ししてくれたのである。

「先生は虐待のことを知らなかったの?」「気づいていたよ。でも何もしてくれなかった。おやじに顔面殴られて右目が見えなくなり口からの血も止まらなかった。次の日登校したけど、兄ちゃんが『俺にやられたと言え』と言ったのでそう言った。本当のこと言うことややこしくなりそうだったから」「虐待は自分からは言えない」「教師は友だちにいじめられている時も見えて見ぬふりした」

翔君が求めているのは、一緒に泣き一緒に怒り一緒に闘おうとしてくれる他者。「児童相談所の心理士は気持ち分かるよと言うけど、その言葉が一番むかついた。虐待は一緒でも背景も中身もみんな違う。そんなに簡単に分かるわけではない」

「ボコる以外でおやじをギャフンと言わせる方法がないか一緒に考えない?」「あるかなあ・・・

・「だって、ボコリに行って翔君が捕まるなんてバカらしくない？」

「俺って嘘つきだよ」

「俺って嘘つきだよ。知ってた？」「知ってるよ」「嘘つかないと虐待が終わらなかった。俺って良いこと言えるでしょう？良いこと言わないと許してもらえなかったから」「ここは誰も虐待しないから嘘つかなくていいし、無理しなくていいんだよ」「分かってる。でも嘘が癖になっていて勝手に口から出てくる」

封印してきた様々な出来事や感情が噴き出るのがごとく翔君は突如多弁になる。

「自分のせいではなく虐待するおやじが悪い。おやじも里親に育てられたけど、今はその人と縁を切って名字も変えている。子どもの育て方が分からなかったのかなあ」「自分のことは大嫌いだっただけど、良いところもあることに気づいてきた。大人のことを全く信じてなかったけど、10%ぐらいは信じていいのかなあと思えるようになったのは井上さんのおかげ」「今は死にたいとは思わない。生きるかあという感じ」傍に居て彼の言葉に耳を傾け続けることが、彼の「生きるかあ」を支えることになる。それが里親の役割。

高校生活がスタートした。道路に出て登校を見送る私に、笑顔で手を振る翔君の姿は数ヶ月で消えた。級友に暴力をふるい言い渡された特別指導を拒否、「俺には学校は向いてない。働いて金を貯める」と退学。定時制か通信制への転校を奨めるも受け付けず、夏の終わりには「あんがとさん」という言葉を残して我が家を後にした。

義務教育終了後に働くという選択をすると里親委託の措置は解除となる。家庭には帰せず、しかし自立が難しい子どもには自立援助ホームという受け皿がある。児童相談所の担当者が確保してくれた自立援助ホームが翔君の新たな生活の場となった。

あれから数年が経過したが、翔君は今も転職を繰り返している。突然やって来たり「暇デン」をかけてきたりして真偽入り交じった近況を聞

かせてくれる。「この前はサーティーワンのアイスクリームだったけど、もっと稼いで、今度は鰻をおごってね」と言うと、「おう、任しとけ」と気の良い返事。自立までにはまだまだ時間がかかりそうだが、翔君は今確かに生きている。

5. 社会的養護の最後の砦 自立援助ホーム

自立援助ホームは、児童福祉法第6条の3に基づき、児童自立生活援助事業として位置づけられている。養護施設などを義務教育終了後に退所した自立困難な子どもたちや家庭の事情により1人で生活していかなければならない子どもたちが、働きながら、あるいは働き学びながら社会へ自立していくために共同生活する場で対象年齢は15歳から20歳（学籍のある場合は22歳）となっている。親と死別、高校中退や施設内不調などで養護施設や里親の措置を中途解除された子、親が引き取りを拒否（または本人が親との同居を拒否）した子どもたちが児童相談所の委託措置で入所している。児童福祉法対象ぎりぎりの年齢である。

入所者は部屋代・食費・光熱費として毎月3万円をホームに納入、国民健康保険・小遣い・携帯代金などもすべて入所者が自らの就労によって捻出。高校に係る経費は公費支給となっているが就労が必須であるため定時制か通信制に通う子が殆ど。しかし仕事と学業の両立に疲労困憊、中途退学を余儀なくされる子も少なくない。退所後は入所者の殆どが住み込み就労または一人暮らしのため、アフターフォローも自立援助ホームの重要な柱となっている。

6. エピソード3 ～母親が突然失踪した恭介君～

恭介君は水商売で働く外国人の母親と二人暮らし。高1のときに母親が仕事を探しに行くと家を出た後、一人暮らしをしながら通学、部活もがんばっていたがやがて送金がストップし音信不通に。食糧が底をつき、電気やガス、やが

て水道も止まり、登校する体力も気力も失せていく。心配して駆け付けた高校の担任に事情を打ち明け、その日のうちに学校が児童相談所に連絡、翌日には里親宅に。部活用具の入った鞆一つ持って、予想に反し爽やかな笑顔でやってきた。

「俺を殺してから出て行ってほしかった」

しかし、その夜真っ直ぐに私を見つめこぼれおちる涙をぬぐいもせず、「大人への怒りの気持ちでいっぱい。何で母親は俺を殺さなかったのか。殺してから出て行ってほしかった」と訥々と語った。「一人でよく生きてきたね。生きていてくれたから、私はきみと出会うことができた。きみを殺さなかったお母さんに私は感謝だよ。きみにも、あの時殺されなくて良かったと思う日がきっと来るよ」

幼稚園年少の頃から夜は一人。最後に母親の手料理を食べたのは小学2年生。その後はずっとコンビニ弁当。「母親が夜中に帰ってきて、腕枕で寝るのが楽しみだった。朝になっても帰ってこない時もあったけどね」「母親がやくざと付き合っていて、そいつがDV。そいつにやられて母親が泣いて俺に抱きついてきたけど、俺、何にもできなかった・・・」「母親を困らせてはいけないとずっと思ってきた」

外国人の若い母親から十分にハグされてきた恭介君には愛着が形成されていた。愛着によって生まれた自己肯定感や他者への基本的信頼感をばねに、恭介君は様々な困難を乗り越えてきたのだと思った。

良き教師との出会い

「ハーフのためいじめにあった。中学年からはけんかが一番になろうと決めた。先生に反抗しまくって目をつけられていた」「夜は寂しかったので、中学生にくっついて毎日夜遊び、バイクのケツに乗せてもらったり万引きしたり。寂しいとは感じなくなったけど、一人で風呂に入るのはずっと怖かった」

犯罪少年への道を進み始めた恭介君であったが、良き教師と仲間との出会いにより方向転換。母親が交際していたDV男から逃げるため他市

に転居、転校した中学校で心機一転、「目立ちたい」一心でいろんな事に挑戦。部活、学校行事や委員会などで活躍の場を与えられ、決して器用にこなせた訳ではないが、担任や級友に励まされながらやり切り、自信もついたと言う。中学卒業記念のDVDに、伸びきった髪、よれよれの制服姿で友だちとふざけたり、合唱祭でタクトを振る恭介君の姿が収められている。「仲間と共に輝いた」思い出と、信頼できる大人との出会いは未来を生きる力となる。

社会人となった恭介君は「幸せな家庭をもって子どもをきちんと育て、その後に里親をやる」という人生設計に向かって着々と歩を進めている。

7. 愛着障害

乳児院・養護施設を経て高1で我が家に来ってきた聡君に「私の愛、きみに届いてる？」と問いかけたことがある。首をかしげ考え込んだ後、恥ずかしそうに答えた。「愛されることがどういうことか正直分からん。愛するってどうすることかも分からん。でも、いつかは分かるようになりたい。なると思うよ」

乳児期から施設や虐待家庭で育ち、特定の愛着対象者を持たなかった子どもたちの生きづらさは想像に余りある。「私はいつも傍にいるよ」「死ぬまでこの家にいるよ」「ここは実家だからね」と、親に代わる特定の大人・里親が声をかけ続けることが、愛着の傷を負った子どもへの手当てとなる。

8. エピソード4 ～親を知らない琉君～

琉君は1才のとき両親が離婚、まもなく母親も失踪。3才まで祖母に預けられその後養護施設に入所。14歳の時施設内で問題を起こし退所させられ自立支援施設に1年間入所、15歳で我が家に来ってきた。彼にとって5ヶ所目の居住地。親の顔も知らず、家庭という安全基地も持たず、特定の大人との信頼関係も構築できないまま、孤独感、疎外感・大人不信をもち

ながら15年間生きてきた琉君。我が家に来てからも何かあると「俺を捨てたいんだろう」と口にした。

「出ていくわ」

ある日の夜、連日のルール破りを注意したところ「分かったわ、俺が邪魔なんだろう。明日荷物まとめて出ていくわ」とふて寝。翌朝、家出用のカバンではなく通学カバンを手に起きてきて何事もなかったように「行ってくるわ」「はい、いってらっしゃーい」。何度か目の「出ていくわ」発言。でも実行することはなかった。それから数ヶ月後今度は金銭問題で注意を受けると「出ていくわ。もう帰ってこんから」「分かったよ。搜索願い出しとくね」。「でも君には行くところないでしょう」という言葉を飲み込んで送り出した。児童相談所に事の成り行きを報告、日付が変わっても帰ってこないようなら搜索願いを出すことにした数時間後、「俺には帰るとこはここしかないんだよ～」と帰宅。「やっと気がついたの?!」「神様と契約した。神様が俺のことを守って約束してくれた」とも。夕食時「ねえねえ、神様に契約料払ったの?」と聞くと「払っとらんけど、食事を一緒にした」とすまし顔。みんなで爆笑。この日を最後に「出ていくわ」発言は消えた。試し行動を経てようやくここが居場所と認めることができたのである。我が家に来て1年が過ぎようとしていた。

「なんで俺は人を信じるができないんだろう」

しかし問題行動はまだまだ続く。施設生活の中で満たされることがなかった愛情・物・友だち・自由・自己肯定感・生きる意味……。彼にとって「普通」の「広い」社会で生きていくことは戸惑いの連続であり、刺激と誘惑に満ちていた。だから問題行動はすべて私にとっては想定内。「失敗したら捨てられる」ではなく「失敗はきみにとって必要なこと、失敗から学びながら大人になっていこう」というメッセージを送り続けた。「どんなきみも愛しているよ」の言葉に返ってくる言葉はいつも「きも!」。

ある日原付の無免許運転が発覚。「ばれなければいいという考え、いつになったら変わるんですか!」と叱責されると黙って部屋に引き上げた。翌朝、キッチンに立つ私の肩を後ろからトントンして「あのさあ、俺変わるから」と真剣な表情。そして「なんで俺は人を信じるができないんだろう」とつぶやいた。養護施設出身のKさん(35歳)の言葉「家庭を持って何かあると嫁は俺の前からいなくなるのではないかと不安になる。嫁を心から信じるができない」を伝えた。「そうか・俺だけじゃないんだ・・・」「きみが心から人を信じるができる日が来るまで私は付き合うよ」「分かった」。自分の意志とは関係なく、大人により次々と生きる場を奪われてきたという体験が、大人不信、他者不信となって彼の心と脳に刻まれ、「大人とマンツーマンでしゃべったのは何か問題を起こしたときだけ」という長年の施設生活でさらに傷を深くしているのだと思った。

「一緒に闘ってほしい」

「施設外の子とほとんど絡めんかった」小・中学校時代を過ごしてきた彼がマンモス私立高校に入学。予想通り人間関係でのつまずき、校則破り、先生に反抗の高校生活。学校から謹慎指導を言い渡され、その後再度の問題行動で退学勧告。「えーっ! たったそれだけで退学! ?」私は怒りを通り越してただあきればかり。「どうする? あんな学校辞めて転校する? それとも残れるように学校と闘う? どちらでもきみが決めたことを私は応援するよ」。しばしの沈黙の後「闘う。一緒に闘ってほしい」。琉君と共に学校に向き話し合い。真摯な態度で学校側の話に耳を傾け主張する琉君。私も、生い立ちや課題を隠さず学校側に伝え、学校も社会的養護の一翼、里親同様彼らの応援団であってほしいと訴えた。結果、「今回は特例で」と退学処分の話は消えた。二人でハイタッチ。大人の力に抗い自分の居場所を守るために闘うという選択をした琉君。自分の人生の主体は自分であることをこの体験を通して学んだ琉君は、謹慎がとけた新学期、立候補して学級委員になった。

嘘や言訳も減り、困ったり悩んだりしたときは素直にヘルプを出すようになった。

「俺のこれまでが1本の線でつながった」

しかし彼の失敗はこの後も続き、警察や司法が絡む事件に発展。その過程で「愛着障害」との診断が本人に伝えられ、児童相談所に出かけライフストーリーワークにも取り組んだ。そして晴れ晴れとした表情で帰宅。「俺のこれまでがやっと1本の線でつながった!」「なんでいっぱい失敗をしてきたのか、なんでここまで生きてこれたのか」「助けてくれる大人がいたから」と言葉を続けた。今は亡き祖母、施設職員、高校の担任、バイト先の雇い主、司法関係者、児童相談所・・・出会ってきた大人たちの顔が次々浮かんできたという。

以後も愛着障害克服のチェック表を二人で時々点検。「他者への信頼」「イライラしない」「自信をもって行動」「他者の気持ちを理解」の4項目。自立を間近にしたある日「俺、愛着障害はもう大丈夫!」と胸を張った。

「頭では分かっているのに行動に移せない」

自立の日が目前に迫ったある日、彼は私に無断で彼女と1泊旅行に。旅先の彼とラインでやり取り。「言っても分かってもらえないと思った」「私への信頼がないってことだよ。きみの行動で私がどんな気持ちなるかを想像できなかったんだよね。悲しいです」。次の日帰宅した琉君と話し合い。「考えたけど、俺は昔からわがままで自己中。やりたいと思ったことは人の気持ちを考えないでやってしまう。普段はそれがいかんと分かっているのに行動に移せない」「なんで出来ないのかが分からん」涙を拭いながら声を振りしぼって言う。彼の涙を見たのは2回目。「きみは、親は育てられないのに俺を生み子どもの気持ちも考えずに勝手に俺を捨てたって言ってたよね。その怒りやうらみを自分も同じことをすることで仕返しをしているんじゃないのかな・・・」一点を見つめ呆然とした表情。そしてつぶやいた。「それかもしれん」「親にやられたことを自分の子どもには絶対にしない大人になるってきみはいつも言ってるよね。家族

への愛を学ぶために、身近な人を愛する力をつけるためにきみは里親家庭に来たんだよ」。彼の心と脳と身体を支配する親への怒り。根幹に横たわる愛着障害の傷にどうアプローチしていけばいいのか。琉君と私に新たな課題が突き付けられた。

「うざいと思う時もあるけど大好きです」

我が家で過ごす最後の正月、新年の挨拶をバイト先からラインで送ってきた。

「明けましておめでとう。あなたは自分の本当の子どもじゃないのに、自分の子どものように接してくれて、考えてくれて、俺は幸せ者だなんて思う。いくら失敗しても見捨てずにずっとそばに居てくれる。俺頑張るから。頑張って必ず井上さんに琉のことずっと見てきてよかったなって思ってもらえるように。いままでいろいろ世話してくれた分、俺がちゃんとした道に進んで、幸せな家庭を持つことが恩返しだから。必ずこの恩返しはする。そんなたいしたことはできないかもしれないけど。だから俺の子ども見るまで頑張って生きてね。ほんとにほんとにありがとう。うざいと思うときもあるけど、何だかんだ大好きです。誰にも言うなよ。恥ずかしいで。」

琉君は現在自立し社会人として安定した毎日を送っている。時々「今日は実家でメシ、よろしく」とやって来ては何人目かの彼女の話聞かせてくれる。想像以上の養育の困難さに直面したが、共に問題行動の謎解きに取り組むことで私の世界は広がり子どもの持つ生命力を再認識することができた。これこそが里親の醍醐味。

9. まとめに改めて

平成28年児童福祉法改正に伴い、養護施設の小規模化と家庭養育優先の原則が打ち出された。平成30年度末の時点で、里親等委託率は、20.5%に上昇したと厚労省は報告しているが、その歩みは遅々としている。安心・安全な家庭生活を経験することが将来家庭を築く上でのモデルとなり、連鎖を断ち切る道。悲しみに寄り添い共に未来を模索してくれる特定の大人を彼

らは求めている。里親委託率の一層のアップが望まれる。

しかし、社会的養護にさえ繋がれず、部屋の片隅で膝をかかえ、「誰か助けて」と不安におのきながら生きている子どもたちもたくさんいる。

声なき声に耳を傾け、応答し、伴走する社会をつくるために学校・家庭・地域・個人は何をなすべきかをこれからも考え続けていきたい。

子どもたちから学びながら、子どもたちと共に。